

沖縄県は、「慰霊の日」に開催する**沖縄全戦没者追悼式**の会場を新型コロナウイルスの感染拡大防止を理由に、例年開催している**沖縄平和記念公園内の式典広場**から**国立沖縄戦没者墓苑**に変更すると公表した。その後、例年通り式典広場で開催することとなった。

追悼式会場の何が問題だったのだろうか？ 新聞に掲載された3人の考えを紹介しよう。

私は、これまで追悼式が行われてきた式典広場と、変更されると発表された国立沖縄戦没者墓苑の現場を歩いた。ずぶぬれになりながら歩き、感じたことは、あの**摩文仁の**一帯は、**二つの顔**があるということだ。

一つは、平和記念公園の中でも、高台となっている丘の上に鎮座する**国立沖縄戦没者墓苑**や、各都道府県の慰霊塔や墓碑群である。そこにあるのは英霊であり、国のために命を捨てる「**殉国**」の思想である。

これに対して、もう一つの式典広場から連なる**平和の礎**やその周辺一帯だ。その一帯には、国家や人種といったものを超えた、いわば**ヒューマニズム**、人間主義があると考える。国立墓苑と比べ、**戦争に対する認識の違い**が場の思想として際立って対照的に見えた。沖縄戦で犠牲になった、たくさんの人々の**声なき魂の叫び**と言えるものを感じてできる場だ。

沖縄全戦没者追悼式を開く場所というのは単に物理的な象徴ではない。いわば、**ウチナーンチュの精神の基盤**でもあると言えるのではないか。（琉球新報6月4日の一部引用）



比屋根照夫氏
(琉球大学名誉教授)

国立沖縄戦没者墓苑が設置されている摩文仁が丘は、**軍司令部壕**が設置されたために、沖縄戦で住民が**多大な犠牲をだす原因**になった象徴的な場所になってしまった。

戦後75年。今回のことは、**沖縄戦の認識を改めて県民に問うこと**になったと思う。国立沖縄戦没者墓苑が設置されている**摩文仁が丘**というのは**沖縄戦でどのような場所だったのか**。それを復習するよう提起されたように思える。
(沖縄タイムス6月12日の一部引用) 石原昌家氏(冲国大名誉教授)



具志堅隆松氏は、式典の意味について次のように述べている。

国家による追悼式はメディアを通じて全国に報道され、そこには国の為政者が戦没者と遺族に寄り添うという姿が国民にアピールされる。遺族の方たちは**高齢化し、近い将来にはいなくなってしまう**であろう。それでも追悼式は続くことを考えると、詰まるところ追悼式とは、戦争を知らない世代に戦死を価値ある犠牲であったとアピールする式典になるのではと**危惧**している。

(沖縄タイムス6月9日の一部引用) 具志堅隆松氏 (遺骨収集ボランティア)



私たちは「追悼式会場問題」について、その場所の歴史を知らなければ、追悼式開催場所の変更に対して、何の疑問も持たないだろう。ここで、歴史を学ぶ意義について触れている記事を引用しよう。

郷土の歴史や自らの**ルーツを知る**ことは、**アイデンティティ確立**に不可欠である。自らの歴史を知ることなく、沖縄の現状や課題を正確に認識し、解決策を見いだすことなど到底不可能だ。**歴史を学んで初めて地域の文化や伝統の価値を認識でき、次世代への継承も可能**になることを肝に銘じたい
(琉球新報2013年3月5日の一部引用)

今回の内容は、1年生にとっては難しい部分もあったかもしれないが、沖縄の将来を担う君たちにはぜひ理解してほしい内容だ。理解できるように努めよう。

沖縄県立宜野湾高等学校長 津留一郎